

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 21 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21500735

研究課題名（和文） 離島における高齢者生活支援ネットワーク形成の研究

研究課題名（英文） Research which forms the network of senile state
in a detached island

研究代表者

赤星 礼子（AKAHOSHI REIKO）

佐賀大学・文化教育学部・教授

研究者番号：10192890

研究成果の概要（和文）：

本研究は、限界集落でもある離島 A 島において、高齢者の生活実態を把握して、そこに問題・課題が有る場合は、有効な解決策を提案したいという実践的な目的から着手した。具体的には、行政、近隣、高齢者のあいだにおける一体的な生活支援のネットワークが形成されることを構想した。結果は、炭鉱の島であった A 島には、現在でも職階制の名残があり、地域での「共助」「協働」の妨げとなっていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

This research grasps elderly people's life actual condition in the detached island A island of a rural community at the limit of viability, and when a problem and a subject occur there, it wants to propose effective solution.

The network of assisted living is wanted to be formed between administration, the neighborhood, and elderly people.

There are vestiges of a job class system in A island which was an island of the coal mine even now, and it has become the hindrance of "mutual aid" in the area, and "collaboration."

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	990,000	4,160,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：高齢者生活、離島の生活、生活支援ネットワーク、過疎化、限界集落

1. 研究開始当初の背景

本研究は、九州家政学総合研究会（生活経営学部会と家政学原論部会の会員の合同研究会）が取り組む第3回目の共同研究としてスタートした。第1回の『高齢化社会と家庭生活—九州地区における現状ならびに課題と提言—』（九州大学出版会、1987年）においては、農村地域（佐賀県伊万里市大川町）における高齢者の生活実態調査研究を行った。第2回の『高齢者生活文化の創造—人生100年を生きる—』（同、1995年）においては、市街化地域（佐賀県鳥栖市）の高齢者・向老者（35歳以上）の生活実態調査研究を行った。

今回も「九州における高齢者の生活研究～家政学研究として～」、農村地域、地方小都市から「離島」に調査対象地域を移して、第3回の共同研究を開始した。「離島」の選定にあたっては、九州の離島の特徴のひとつである炭鉱閉山の島を候補とした。長崎大学の地域保健教室が実施した『炭鉱閉山の島に学ぶ～長崎県高島町～』報告書（1991）という先行研究から20年経過しており、その後を検証することに意義があると考えた。また、高島町が2001年市への合併もあり、益々離島における高齢者の生活実態解明を急ぐ必要性を感じた。

2. 研究の目的

今回の共同研究の調査対象地は、高齢化率が50%を超える限界集落であり、人口減が著しい過疎地でもある島である。今後の高齢者の生活文化を創造していくうえで、有用な示唆に富む高齢者の生活実態が「ある」と考える。そこで、高齢者の生活実態を構造的に把握し、そこに生活問題・課題はないか、そして問題・課題がある場合には有効な解決策を提言したいという実践的な研究目的を再確認して研究に着手した。

3. 研究の方法

本研究は、2007年3月の現地調査（事前調査）から始めた。研究対象地の第一は、長崎市に2001年に合併された町であったA島であるが、比較研究のために同じように長崎市に合併されたB島（伊王島）、また、C島（池島）

も調査対象地に加えてきた。高齢化・過疎化の著しい長崎市の3つの島について、高齢者の生活実態を「歴史・地理・交通」「人口・家族・隣人」「消費・住居・余暇」「福祉・医療・行政」の4つの枠組から把握することに努めている。文献・資料調査と並行して、各島では、行政センター、派出所、診療所、高齢者施設、寺院、小・中学校などにおける訪

問聞き取り調査、また、各島の高齢者への個人あるいはグループ面接調査を重ねており、質的調査である。年間2～3回実地調査を行っている。

4. 研究成果

（1）歴史・地理・交通

3島は、炭鉱閉山の島という歴史を共通するが、A島は100年以上に及ぶ操業から1986年に閉山、B島は1941年から1972年の31年間、C島は1959年から2001年の42年間の操業であった。

3島ともに比較的小さな島である。島の人も、「ここは、島だから」と表現する。島の狭さが意識されている。

陸地との交通は、船である。A島、B島（A島が終着地）と陸地の間には1日11便の高速船（定員268名）の運航がある。C島との間にも船便が14便ある。

島内では、各島ともコミュニティ・バスが1日10往復程度巡回している（乗車券100円、高齢者50円）。

3島とも、現在は、離島振興法と過疎地域自立促進特別措置法の指定地域である。しかし、B島と陸地の間には2011年3月に対岸との間に大橋が開通し、2012年には、離島ではなくなる。

（2）人口・家族・隣人

A島のピーク時は1960年（国勢調査）の20,938人であったが、閉山後の1990年には1,256人へと激減した。2010年末日で539人、352世帯である。B島も、ピーク時は7千人を超えたが、現在（2010年末日）は、774人、451世帯である。C島も、同様で7千人以上から、現在は310人、202世帯と過疎化が進んでいる（2005、2010年は、住民基本台帳調べ）。

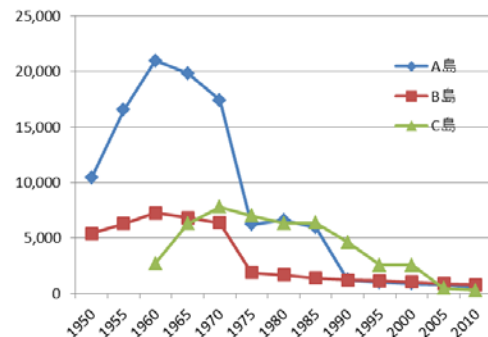


図1 3島の人口減少の推移

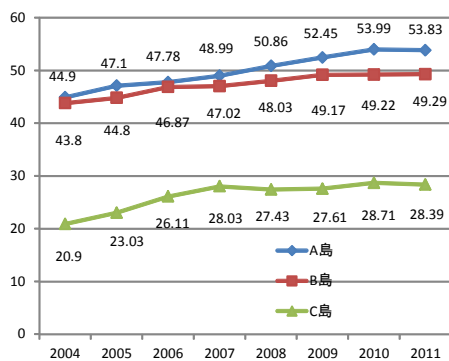


図2 3島の高齢化の推移

人口の高齢化も顕著であり、A島は2010年末で54%、B島は49%、C島は29%となっている。平均世帯構成員数も、これまで逡減傾向にあり、現在はA島1.5人、B島1.7人、C島1.5人になっている。したがって、高齢者世帯は、一人暮らしか夫婦のみ世帯で構成されており、老親子同居は極少数である。三世代同居世帯はみられない。

高齢者や、若い年齢層の男女に質問したところ、島では「同居志向」は低い。別居子との交渉頻度は、距離や子家族のライフ・ステージとの関係を考慮しても比較的高いようである。

隣人・友人との関係は、狭い島内のことでもあり「知らない人はいないが、付き合いをする人は少ない。」という返事が男女ともに返ってくる。3島とも炭坑の島であったが、特にA島では、その歴史が長く、炭坑における「職階制」が、今なお島の人間関係に影響を落としているといえよう。

A島では、女性高齢者にはいくつかの緊密なグループが形成されており、趣味の会や茶話会などの楽しみを共有し、さらには台風などの緊急時避難の際には助け合うなどしている。

(3) 住居・消費・余暇

3島の住宅事情は、炭坑の島であったことにより特徴がある。まず、住宅の建て方が、3～5階の共同住宅の割合が高いことである。A島では、さらに高層の6～10階建ての共同住宅がある。共同住宅に住む世帯割合は、A島80.5%、B島39.8%、C島67.0%であり、一戸建てはB島56.6%である。人口密集の高い時期に、炭坑アパートや町営アパートの高層化があったことが分かる。したがって、持ち家率は低い。

A島についてみると、島の約8割が市の所有地でもあり、公営借家が79.8%を占める。

直近の状況変化として、2010年に古い公営住宅(高層住宅)3棟を取り壊して、新築2階建ての公営住宅に集住がすすめられた。古い住宅は、炭鉱の職階制により入居していたため、空き室の多い中ではあるが、各々で近所付き合いはあったようである。しかし、新築アパートに入居して1年以上経つが、まだ自治会は機能していない。

3島とも平坦地ではないことから、高齢になり坂道の歩行が負担になった場合は、「買物弱者」になることが懸念される。3島とも「スーパー」や「ショッピングセンター」があるが、どこも小規模なものであり、夕方5時前には閉店する。A島の公設市場も朝7時に開店し、9時頃には商品も減り、閉店状態になる。一応、日常生活に必要なものは、島内に揃っているとはいえるだろう。ただし、高齢者は、島内の店舗数や商品の品揃えが充実していた往時を知っており、現状への不充足感が高い。

3島とも、公民館主催での文化サークルや講座などが開かれているが、参加者は固定的で限られた人たちの集まりとなっている。さらに、参加者は内容にもよるが女性が多く、男性は少ない。A島、B島の高齢男性の余暇活動は、釣りが多く、船を所有する人も多い。

(4) 福祉・医療・行政

島の高齢者の生活不安のなかで最も大きいと思われるのは「健康不安」である。A島には、24時間体制の診療所があるが、入院が出来ない。入院が必要な場合は、救急艇で市内の病院へ搬送される。したがって、A島の高齢者は「救急艇で運ばれたら(生きて島には戻れないと)覚悟を決めている。」と語っている。

また、A島では、市への合併により島の火葬場が閉鎖された。そのために、島では葬儀も行われぬ。上記のように市内の病院で亡くなる場合が多く、そのまま市内の葬儀社に葬儀を依頼することになるのである。

B島は、大橋の開通により、診療所の診療時間が平日の昼間だけに短縮された。夜間や休日の急患は、対岸にある総合病院に搬送することになった。大橋も、強風の場合は車も通行止めになることもあり、「不安はある(残る)」ことになる。

このB島には、NPO法人の宅老所がある。元保健師が発起人・運営責任者である。現在、新施設の建築中で、活動内容もデイ・サービス、ショート・ステイに加えて学童保育や配食サービスなど充実させたいと意欲的である。すでに、島の80歳以上の高齢者の通所希望が受け入れを超えるほどである。

C島では、「体が弱ってきたら、早目に島

を出る。」と高齢者自身も、行政関係者も語っている。行き先は、対岸での居住、施設に入所する、入院する、など選択肢は様々である。C島にも診療所はあるが、診療は週日のみであり、医師は島外からの通勤である。船が欠航すれば、島には医師がいないことになる。

まとめにかえて

以上、A島を中心に高齢者の生活を概観した。A島の高齢者が「人生の集大成期における生活主体として最大限に活動する」ために、社会と調和・共生する「配慮」「協働」「ケア」の視点から方策を探っている。現時点では、行政が地域の人間関係形成を援助すべきであるということ強調したいと考える。

A島は、市への合併により、市レベルでの行政サービスが展開されている。しかし、住民は島のことを熟知した職員を期待している。職員には、高齢者の心の機微までを理解し、島内の新たな人間関係形成に積極的役割を果たすことが求められていると推測している。

A島の高齢者には自らも他者の生活に配慮して、共に互いの生活を支え合うために働きたいという欲求はあると理解している。しかし、高齢者の自助努力には限界がある。行政の支援や、配慮が必要である。

今後は、行政の支援や配慮のあり方を具体的に提言したい。そのためには、島の高齢者が「生活主体として」よりよく生きるためには何が必要なかをさらに探究したいと考えている。

2011年に入って、A島において「変化の兆し」がみられる。行政センターの職員の移動等もあり、人的構造が変わってきている。その結果、かつては取り入れられなかった「協働」が実現されるのではないかと期待がもてるようになった。早急な結論は避け、今後も実地調査を継続することにしている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 2012. 3.31 (社)日本家政学会 生活経営学学部会 生活経営学研究 No.47 21~24 頁 離島における高齢期生活の持続可能性 赤星礼子、後藤直子、川口恵子
- ② 2011. 9.15 日本福祉文化学会編集委員会編、新・福祉文化シリーズ5『福祉文化の源流と前進』、明石書店、208~218

頁、「高齢期生活モデルの研究—生活福祉の視点から—」赤星礼子

[学会発表] (計 10 件)

① 2011.10. 22 (九州女子大学) (社)日本家政学会九州支部大会 (第 58 回) 九州における高齢者の生活研究—島の消費生活について— 川口恵子、赤星礼子、小川直樹、後藤直子、米村敦子、花崎正子、田中孝明、財津庸子、谷村賢治

② 2011. 8. 28 (昭和女子大学) (社)日本家政学会 生活経営学学部会 夏期セミナー 共通論題「離島における高齢期生活の持続可能性」 赤星礼子、後藤直子、川口恵子

③ 2011. 1.29 (佐賀市民活動センター) 日本人口学会九州地域部会研究会 離島における高齢者生活研究 赤星礼子

④ 2010.9. 25 (琉球大学教育学部) (第 57 回) 九州における高齢者の生活研究—離島の生活空間構造について— 後藤直子、赤星礼子、小川直樹、川口恵子、花崎正子、田中孝明、米村敦子、財津庸子、谷村賢治

⑤ 2009.10. 17 (西九州大学短期大学部) (第 56 回) 九州における高齢者の生活研究 (第 5 報) 1) 長崎市伊王島町の生活立地の現状 小川直樹、赤星礼子、後藤直子、川口恵子、谷村賢治、田中孝明、財津庸子、米村敦子、花崎正子
九州における高齢者の生活研究 (第 5 報) 2) 長崎市伊王島町の生活実態の特質 田中孝明、小川直樹、赤星礼子、後藤直子、川口恵子、谷村賢治、財津庸子、米村敦子、花崎正子

ポスター発表

⑥ 2010.11.6 (長崎純心大学) 日本福祉文化学会全国大会 (第 21 回) 高齢期生活モデルの研究—生活福祉の視点から— 赤星礼子

⑦ 2010.5. 10 (広島大学) (社)日本家政学会第 62 回大会 高島における高齢者の生活研究 (第 3 報) 後藤直子、赤星礼子、

小川直樹、川口恵子、米村敦子、田中孝明、
花崎正子、財津庸子、谷村賢治

⑧ 2009.8. 31 (武庫川女子大学) 第 61 回
高島・伊王島における高齢者の生活研究 (第
2 報) 小川直樹、赤星礼子、後藤直子、
川口恵子、谷村賢治、田中孝明、米村敦子、
財津庸子、花崎正子、根笈美代子

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤星 礼子 (Akahoshi Reiko)
佐賀大学・文化教育学部・教授
研究者番号：10192890

(3) 連携研究者

小川 直樹 (Ogawa Naoki)
筑紫女学園大学・文学部・教授
研究者番号：80105204

後藤 直子 (Goto Naoko)
香蘭女子短期大学・ライフプランニング
学科・准教授
研究者番号：60290623